

世紀転換期ウィーンの建築家と職人  
-フリードリヒ・オットー・シュミットを事例として-

正会員 ○ 浦上卓司\*  
正会員 中谷礼仁\*\*

フリードリヒ・オットー・シュミット 19世紀末ウィーン 家具職人  
近代運動 アドルフ・ロース

1. 研究目的と対象

19世紀末頃のウィーンで活躍したアドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933, 以下ロース) 等の建築家に関して、その思想や意匠的な側面については既往研究にて知られている。しかし彼らのデザインを実現する行程に関する研究はわずかである。よって本研究では、彼らと協働した作り手組織の実態を解明したうえで、当時の建築家が職人達から受けた造形上の影響を考察する。

対象とする Friedrich Otto Schmidt (以下 FOS) は 1853 年にウィーンにて創業して以降、現在も続く老舗の高級家具工房として知られる。本研究の過程においては、1902 年にオーストリア皇帝と謁見する当時の FOS 代表の姿をおさめた写真が発見された (Fig.1)。この史料からも FOS が当時から高位の家具工房であったことが伺える。



Fig.1 アッター湖を船旅中の皇帝 (左) に謁見する FOS 代表マックス・シュミット (右) (ウィーン市内 FOS 工房所蔵, 写真解説は現 FOS 代表のクラウス・ローレンツ氏による)

また FOS がロースやウィーン工房の建築家達と協働して家具を製作した事や、多種多様な様式に対応した家具を作ったことはこれまでに明らかにされている。しかし一方で、それらの既往研究においては FOS のスケッチや家具の完成写真等の視覚資料が分析対象となっており、FOS の高級な生産体制を持続させた要因については十分明らかにされていない<sup>1)</sup>。

2. 研究方法と中心資料

本研究では、ウィーンに在る FOS の工房を探索した結果得られた史料である、世紀転換期当時の「顧客住所録 (Kunden Adress Buch)」 (Fig.2) の分析を通じ、FOS を支えた社会的ニーズを明らかにする<sup>2)</sup>。



Fig.2 顧客住所録の書影 (筆者撮影)

この「顧客住所録」は、そこに記された人物の生没年などから 1897 ~ 1900 年の間に作成されたものと推定できた。内容は「氏名」、「住所」、「称号・肩書き」の 3 項目からなり、総ページ数は 121 頁、記載された人数は 911 名であった。ほとんどの人物は整った書体で統一して記されるが、異なる筆跡による記名も数件確認された。

3.FOS の顧客の居住範囲と身分階層

記された全員の全項目を活性化したうえで、住所と称号・肩書きそれぞれに着目し、分析した (Fig.3)。

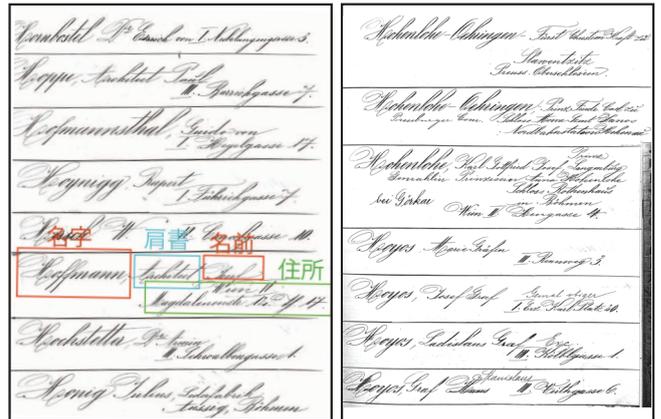
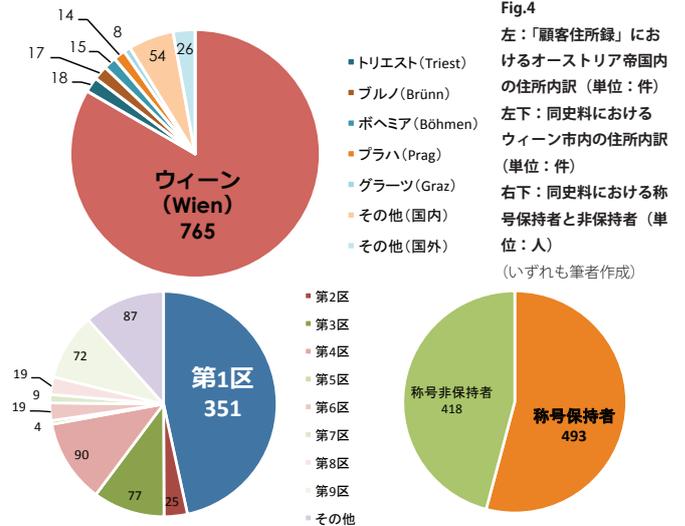


Fig.3 「顧客住所録」におけるヨーゼフ・ホフマンが記名された頁 (p41,42. 筆者加筆)



オーストリア帝国における FOS の顧客の住所としては、ウィーン市が全体のおよそ 7 割以上を占めていた (Fig.4 左)。またウィーン市内においては旧市街に当たる第 1 区が約半数弱を占めている (同図左下)。すなわち、国内の FOS の全顧客のおよそ 4 割程度がウィーン市第 1 区という狭い範囲に集中していた<sup>3)</sup>。同時期に FOS はブダペストにも工房を有しており、他地域にも顧客が居たことが分かっている<sup>4)</sup>が、オーストリア国内において首都圏に顧客が一極集中する業態は特筆に値する。

また、FOS の顧客の過半数は何らかの称号を持つ人物であった (同図右下)。例えば上級貴族 (Fürst, Graf, Prinz

等)や下級貴族 (von, Ritter, Baron, Freiherr 等)、当時の帝国官僚 (k.k., Rath, Rittmeister 等)、大学関係者 (Professor, Dr) に加え、建築家 (Architektur) 等である。

以上のように、FOS はウィーン市内の特権階級を主な顧客としており、顧客層は地理的にも所得階層的にも限定されたものだった。

#### 4. 家具工場の差異と建築家への影響

FOS の業態上の特徴は、上述のようにウィーン市内の高所得者層を主たる顧客としたことであった。

これに対して、同じくウィーンの木製家具工房であり、当時の建築家と協働した木製家具工房のトーネット社は、低質な木材をも活用した大量生産によって世界中を市場としていた<sup>6</sup>。こうした各々の工房の特性は、建築家の造形に大きな影響を与えた。

例えば、FOS には「クッション付き肘掛け安楽椅子 (Wulstlehnfauteuil)」と呼ばれるアームチェアの様式があった。従来は布張りであった足元の滑り止めを真鍮製にしつつ、背もたれに布を張り柔らかくしたモデルであった<sup>7</sup>。

ホフマン、ロースそれぞれとの協働制作時にもこのアームチェアの基本的な様式は共通していた (Fig.5 左部)。

またトーネットと建築家の協働においても、建築家それぞれの作風は認められるものの、その造形にはトーネットの基幹技術である曲木の造形が反映され、脚自体に装飾が施されないといった形式が通底してある (Fig.5 右部)。

このように、世紀転換期ウィーンの建築家が協働したのは「ウィーンの」「木製の」「家具工房」と限定してもなお FOS とトーネット程に相異なり、かつ造形に影響力を

持つ「職人」だった。

職人集団が世紀転換期ウィーンの建築家たちに与えた影響はプロダクトデザインのみならず、建築設計の方法論においても見出せる。例えばロースは度々、建築家が多様な独立家具に対しデザインを試みると不調和をきたすため、建築家は造り付け家具の設計に注力すべきだと主張している<sup>8</sup>。そして、ロース独特の空間構成 (ラウムプラン) やファサードは、造り付け家具の設計と不可分にデザインされていた<sup>9</sup> (Fig.6)。FOS やトーネット等の職人集団間の差異は、建築家の方法論、ひいては空間デザインにも影響を及ぼしていたのである。



Fig.6 アドルフ・ロース設計のミュラー邸室内 (Burkhard Rukschcio, Roland Schachel, "ADOLF LOOS" Residenz Verlag, 1982, p615, 筆者加筆)

#### 5. 結論

近代運動上の「職人」は、製作する家具の種別や工房の所在地が同一であっても、互いに異なる生産体制を有した作り手組織だった。

そして、世紀転換期ウィーンの建築家の方法論形成の一因には、室内のデザインに影響力を持つ職人集団間の相異なる特徴があった。

#### 6. 謝辞

本調査過程でお世話になった FOS 代表のクラウス・ローレンツ (Claus Lorenz) 氏ならびに従業員の方々、日本 FOS 代表の菊地広高氏に厚く御礼申し上げます。

**註**

1 FOS についての主要な既往研究は Eva B Ottlinger, "Adolf Loos: Wohnkonzepte und Möbelentwürfe" (Residenzverlag, 1994) と Rostás Péter, "Mágnások lakberendezője" (GEOPEN KÖNYVKIADÓ KFT, 2010) の 2 点である。双方とも FOS 所蔵のインテリアスケッチや当時の旅行写真を中心とした一次資料としている。前者は FOS を当時の工芸運動を体現する家具工房として記述し、後者は FOS が古代から近代にいたるあらゆる様式の家具を作った事を実証した。しかし FOS の顧客等の生産体制についての分析は不十分であった。

2 2014 年夏季、筆者がウィーンの工房を訪ね資料探索を行ったところ、当工房の資料庫より本史料を発見した。なお 1920 年代に作成されたと思しき「顧客住所録」も発見し、記録したが、本研究の対象年代とは異なるため分析していない。

3 リングシュトラッセ (かつての城壁を撤去した後に 1850 年代後半から 1860 年代にかけて建設された環状道路) に囲まれた旧市街地が第 1 区である。その面積は約 3 km<sup>2</sup> であり、極めて狭い範囲に FOS の顧客が集中していたと言える。

4 R. Péter 著 "Mágnások lakberendezője" (p88) 参照。

5 顧客の中には称号や住所を複数持つ者も多くいたため、称号と住所それぞれの記載件数は顧客の人数を越えていた。また、住所録には判断不能の記述も若干含まれているため、住所における各地名の記載件数は概算的なものである。

6 1842 年にトーネット社は「もろい種類の木材を化学的、機械的方法で、好む形に湾曲させる」特許を請願している。(カール・マンク著、宿輪吉之助訳『トーネットの曲木家具』(鹿島出版会, 1985) p28 より)

7 この様式は、ウィーン第一区内にあるオーストリア博物館で催された 1897 年の冬期展示会で、当時の館長 (その名前も顧客住所録に記載されている) と共に提案したものである。R. Péter 著 "Mágnások lakberendezője" (p199) 参照。

8 「真に現代的な建築家は何をなすべきか? すべての家具を、もはや動かさないよう壁の中に埋め込んで作り付けるのである。」(アドルフ・ロース「家具の終焉」(1924)より引用)あるいは「建築家は職人の造り付けではない本来の家具をつくる仕事に手を出すなといたい。なぜなら今日の建築家が設計したそれは現代的でなく、職人が作った本来のものこそが現代的だからである。」(アドルフ・ロース「家具と人間」(1929)より引用)。いずれも『にもかわらず』(アドルフ・ロース著、加藤淳訳、みすず書房, 2015) 所収。

9 既往研究 (斎藤亜紀子「アドルフ・ロースの家具調度による空間計画の研究」(2012)) では、ミュラー邸の造り付けソファのある室内空間はそのままファサードに突起として表れていること等が指摘されている。

		工房の様式	
		Fridrich Otto Schmidt	Thonet
作家の様式	Josef Hoffmann		
	Adolf Loos		

Fig.5 各工房と各作家による協働の分析ダイアグラム

(筆者作成。図版出典は FOS とホフマンの協働作が R.Péter, "Mágnások lakberendezője" (GEOPEN KÖNYVKIADÓ KFT, 2010) p153、ロースとの協働作が同書 p199、トーネットとホフマンの協働作が K. マンク『トーネットの曲木家具』(鹿島出版会, 1985) p145、ロースとの協働作が同書 p139)

\* 平成建設

\*\* 早稲田大学理工学術院建築学教授

\*HEISEI Corporation

\*\*Prof, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng